

左側頭葉後下部梗塞後，漢字の失読失書を呈した1例

谷哲夫(たにてつお)

日高病院リハビリテーションセンター

要旨 左側頭後頭葉下部の梗塞後に失読失書を呈した患者に対し，小学1.2年教育漢字の読み書き検査および失語症語彙検査を実施し結果の分析を試みた．教育漢字の検査では，漢字書字の正誤の間に学習容易性と画数の有意差が認められた．書き取りのできない漢字について偏や旁などを提示しても形態想起はできなかった．運動覚促進効果は画数の少ない漢字であれば有効であった．語彙判断検査において漢字の単語と非単語の判断に誤りが生じた．これらから漢字の書字障害一に要因として，複雑な視覚イメージとその想起の不安定が考えられた．本例は仮名非語の音読は可能で，漢字の音読では非一貫語における音価選択の誤りを認め，表層性失読の特徴を有した．

Key words: 左側頭葉後下部，失読失書，語属性

はじめに

後頭葉に隣接した左側頭葉後下部の病変で漢字の失読失書が生じることがIwata(1984)により明確にされて以来，詳細な検討が積み重ねられている．失読失書は純粹失読と異なり多感覚連合系の障害と見なされ，事実，少なくとも筆者の検索しうる範囲では，運動覚促進効果が失読失書例において観察されたという報告はない．能登野ら(1991)は左側頭葉後下部病変による失読失書13例における漢字と仮名の障害を比較したところ，共通することとして漢字の失書が強いことをあげた．

本研究では左側頭後頭葉下部の梗塞後に失読失書を呈した患者に失語症語彙検査および小学1.2年教育漢字の読み書き検査を実施し，分析を試みた．

症例

73歳，右利き男性．運転手．2001年1月早朝，ラジオの天気予報を聴いている最中，アナウンサーの「チチブ」という言葉に，聞き覚えはあるのに，「秩父」という漢字が想起できなかった．さらに自分の氏名，住所も書けなくなっていることに気づき，頭重感もあり，すぐに家族に連絡し近医入院．神経学的検査で異常なく，保存的加療し経過観察となった．入院後2日間は自分の氏名，住所を言うことも書くこともできなかった．しかし，相手の言うことは完全に理解できた．発症初期には，漢字・仮名ともに読み書きが困難であったが，次第に仮名の読み書きは改善した．

2月より言語訓練目的で当院外来通院を開始．**神経学的所見**：意識レベルは清明．Visual fieldは対坐法でfull．運動麻痺は認められず感覚も正常．日常生活動作は自立していた．**神経心理学的所見**：礼節は保たれていた．見当識は正常．WAIS-RのVIQ105,PIQ106,TIQ106と知的レベルは保たれていた．HDS-R26/30．MMS28/30．両検査ともに呈示した物品の遅延再生課題で失敗した．WABでは動物名のWord Fluencyで10語と低下．色名呼称と理解5/6．書字では漢字単語の書き取りで低下した．数字の書字は正常であった．風景画の表現では，平仮名を多用する傾向が強かった．さらに一つの単語の中に平仮名と片仮名が混在することがあった．音読では意味的錯読の他，形態的類似の誤りが観察された．仮名文字に対しては音韻性錯読が出現．自己修正を試みて何とか正確な音読に到達した．一方，会話では錯語はみられなかった．図形の模写では，人物画に簡略化がみられたが，3次元構図の家や透視立方体は正確であり，明らかな構成障害は認められなかった．

頭部MRI画像：左側頭後頭葉下部に限局した病変を認めた．

方法

1.教育漢字テスト

小学校1・2年の教育漢字214語を抽出した．内訳は漢字1文字名詞95語，漢字2文字名詞50語，漢字仮名交じり動詞36語，漢字仮名交じり形容詞33語とした．名詞のうち145語

については、健常者延べ65名(平均年齢24.2歳、範囲18-39歳)を対象として具体性、心像性、学習容易性、象形性の主観的尺度を5段階で評定してもらい、平均値を導入した。使用頻度は国立国語研究所の「現代雑誌90種の用語用字」調査(1962, 1963, 1964)を導入した。この教育漢字テストでは、漢字および漢字に対応する仮名の書き取りと音読を本例に実施した。

2. 失語症語彙検査

失語症語彙検査は近年の単語情報処理研究の成果をもとに、情報処理という立場から臨床症状を把握しようとするを意図している。本検査のうち、文字列から視覚入力辞書へのアクセス機能を評価する語彙判断検査、語の意味コードへのアクセス機能を評価する類義語判断検査、文字コードから意味コードまたはその逆のアクセス機能を評価する名詞・動詞検査を本例に実施した。

3. 統計処理

書字・音読成績と語属性との関係についてはMann-Whitney U testを用い、有意水準5%未満をもって有意とした。

結果

1. 教育漢字テスト

漢字の書字では、成績のよいものから漢字1文字名詞(56.8%)、動詞(33.3%)、漢字2文字名詞(30%)、形容詞(21.2%)。漢字の音読では、成績のよいものから漢字1文字名詞(94.7%)、漢字2文字名詞(80%)、動詞(77.8%)、形容詞(51.5%)の順であった。仮名の書字では、形容詞(100%)、動詞(97.5%)、名詞(93.6%)。仮名の音読では、動詞(97.5%)、名詞(92.2%)、形容詞(90%)の順であった。

1) 語属性と音読・書字の正誤

教育漢字テストのうち漢字1文字名詞95語と漢字2文字名詞50語について、漢字と仮名の書字・音読の正誤と語属性の関係について検討した。漢字書字における正誤の間には1文字名詞、2文字名詞ともに学習容易性と画数のみ有意差が認められた。漢字音読、仮名の書字、音読では正誤の間に語属性の有意差は認められなかった。

2) 動詞・形容詞と頻度、教育学年、画数

漢字書字における正誤の間に画数のみ有意差が認められた。

3) 誤反応の種類

漢字書字の誤りは無反応と形態的な誤りが目立った。形態的な誤りは「月」を「明」、

「王」を「玉」のような実在する漢字への付加のほか、存在しない文字を書くこともあった。想起不能であった漢字を正確に模写できないことがあった。扁または旁を視覚提示しても漢字を想起することは出来なかった。運動覚促進効果は画数の少ない漢字であれば有効であった。

漢字の音読では「森林」を「もりばやし」、

「正しい」を「まさしい.....せいしい.....しょう.....」、と読むなど意味処理過程を伴わないことから生じるとされる音価選択の障害が多数観察された。また、「山」を「で(出)」と音読するような形態的類似の誤りもみられた。なぞり読みは効果がなかった。漢字に対応するひらがなの音読では「ほんてん」を「はんてん」、

「かお」を「かわ」のように文字の形態的類似による音韻性錯語が目立った。

2. 失語症語彙検査

本例の語彙判断検査成績は漢字で低下した。漢字の成績は頻度よりも心像性に依存した。一方平仮名は誤りがなかった。

名詞表出検査における口頭表出は34/40正答。書称では平仮名と片仮名が混在する単語を書くことがあった。類義語判断検査は、心像性・頻度に関わらず成績は良好であった。

2. 経過

検査から2ヶ月後の症状と比較する。書き取りについては正答率単漢字で45%。形容詞で87%と高く、無反応が最も多かった。写字障害も残存した。漢字音読では、音価選択の誤りから類意味的誤りが多くなってきた。

3. 考察

本例は当初、漢字熟語の音読で音価選択の誤りが多く観察された。音価選択の誤りは意味システムを通過していないか、または意味システムそのものに障害あることが想定される。類義語判断検査で、音読の誤り方が対の語の意味が同じか否かの判断に影響した。また、無反応が生じた場合は意味の類似的判断ができないことが観察されたことは、音読と読解に目立った乖離を示さなかったと解釈できよう。経過により、類意味的誤りが多くなってきたが、類意味的誤りは、視覚処理された情報が少なくとも意味システムに入ることを意味すると思われる。語彙判断検査では、漢字の単語と非単語の判断に誤りが生じた。また漢字の偏や旁を提示しても漢字を想起できなかったことなどから漢字の視覚心像が不安定になっていると考えられた。